

V

日独通訳者養成セミナーの活動

相澤啓一（筑波大学 人文社会科学研究科 教授）

日通訳者養成セミナーは、2002年に設立されて以来、月一度の勉強会と年1～2回の合宿セミナー

（Blockseminar）の2本柱で活動を続けている。2008年も、通算第10回のセミナーを3月24日から26日まで、また第11回セミナーを8月22日から25日まで、それぞれつくば市で行なった。うち後者は、レギュラー参加者向けではなく会議通訳者として活躍するプロの通訳者のために2006年度に新設されたいわゆる「つくべるすはいむ・ゼミナール」の第3回であったので、ここでは主として第11回の模様をご報告しておきたい。

私たちのセミナーがつくば市で集中合宿を行なっているのは、同市にある産業技術総合研究所（AIST）国際部門のご厚意により、その施設を使わせていただくことができるからである。ここにある座席数12名程度の会議室にはすばらしい同時通訳施設が備わり、かつリーズナブルな価格で宿泊施設までご提供いただけるため、私たちが目指す研修には願ってもない施設となっている。本年の合宿では、実践的な会議シミュレーションをいくつか企画することができた。

まず初日の3月24日には、相澤の本務校である筑波大学に場所を借り、参加者たちは実際に同大学の学生たち向けに公開された筑波ドイツ文学会主催の学内シンポジウムを通訳した。大学間国際交流をテーマとしたこの講演会では、まず同大学の武井隆道氏がバイロイト大学との協定交流を紹介し、次にバイロイト大学のハインツ・ペールマン国際交流課長が、バイロイト音楽祭で世界的に有名なバイロイト市の紹介と、比較的小さな都市にありながら高い評価を受けているバイロイト大学のプロフィールを話された。参加者による日独両方向の通訳は質疑応答を含め比較的順調に推移し、初めて公の場で通訳した参加者にとっても大きな自信となったと思う。

翌25日には産業技術総合研究所国際部門に戻って、常日頃から私たち

の活動に大きな理解を示し支援してくださっている大見孝吉所長から、「製造業の方向と技術開発」についてのというご講演をうかがった(写真1)。私たちが日々当然のように享受



している商品やしくみの陰には、多くは中規模の製造企業の膨大な開発努力が積み重ねられていること、また、工作機械のような地味な分野に関心を持つ人は多くないがその割合が比較的高いのが日本とドイツである、といったお話は、ドイツ語にかかわる私たちへのサービス精神にも溢れており、内容的にも大変に興味深いお話であった。

26日には再び筑波大学に場所を移し、ドイツの教育・家族政策に関する公開シンポジウムを通訳した。まず長年にわたって小学校教育に携わり、外国人児童の指導にもあたっておられたベルベル・ペールマン氏から、「バイエルン州の学校制度」についての講演があった。続いて筑波大学の相澤啓一氏による「ドイツにおける家族と高齢者介護のあり方」についての講演があり、ドイツと日本の介護政策の細部にわたる比較が紹介された。家族政策については多様性を認めているドイツの政策のほうが、日本より現代の変化に対応できており、介護政策についても同様のことが言えるものの、高齢になるとともに日本に多い「定食型サービス」の良さもドイツでも再認識されている、とのご報告は、興味深いものだった。

シンポジウム終了後は3日間の講演も含めた通訳内容に対する反省会を行った。今回の集中ゼミナールは、講演者としてもご登場をいただいた大見所長を始め、ペールマン夫妻、また筑波大学の武井・本澤両氏

ら多数の方々のボランティアによるご協力を得て初めて成立するものであった。多くの方々のご協力に、改めて心よりの感謝の意を記しておきたい。

さて、集中合宿に加えて月々の例会も順調に行なってきたが、特筆すべきは9月22日の例会であった。というのも、この時期にはちょうどドイツのハイデルベルク大学でも2週間にわたる日独両言語間の通訳コースが開かれており、双方で連絡をとりあった結果、現地で最終日にあたるこの日、ネット中継によりシミュレーション会議通訳の映像を駒場でも見ることができるようアレンジができたからである(写真2)。ハイデルベルク大学での通訳コースは、国



際交流基金ほかの支援を受けてゲルマースハイムで行われてきた集中コースを継承したもので、本年が第3回目のものであった。そこで教員をつとめるAsa Bettina Wuthenow、Aya Ikuma-Puster、関川富士子さんたちとはさまざまに連絡をとりあっており、これまでもゲルマースハイムの経験者がDESKのコースに参加したり、逆にDESKの通訳コースから何人かがハイデルベルクのコースに参加するといった形の交流も続いてきた。2009年冬学期からはハイデルベルク大学の通訳翻訳のマスターコースで扱われる言語の中に日本語が加わることが決定しており、すぐれた日独通訳者の養成をめざして今後ますます緊密な交流が望まれるところである。その意味で、私どものDESK日独通訳コースも、ますますその活動を充実させてゆきたいと考えている。

VI DESKの教育プログラムより

ACADEMIC PROGRAMS

2008年度、DESKの教育プログラムに参加した学生から合わせて12名の修了者ができました。欧州研究プログラム（ESP）を8名の学生が修了し、「修士（欧州研究）」が授与されました。今後も総合文化研究科の学位授与プログラムであるESPと、主に総合文化研究科以外のヨーロッパを対象とした社会科学分野を専攻する大学院生への研究支援を目的としたZDS-MAによって修士課程の教育プ

ログラムが運営されます。また、DESKの教育プログラムには、学部後期学生の海外での現地調査を促すZDS-BAや博士論文執筆のための現地調査を支援するZSPなど、学生の所属に応じた奨学助成金制度が準備されています。2008年度は、European Fall Academyや北京大学ドイツ研究センターとの合同法学セミナーなどの開催もあり、修士課程の学生を中心に延べ39件（学部後期11・修士課程

27・博士課程1）の調査研究・セミナー参加に奨学金が助成されました。今年度も夏・冬の各学期に助成金の申請を受付しますので、ドイツ・ヨーロッパに関する研究・調査計画のある方は積極的にご応募ください。応募の詳細については、DESKのホームページで確認してください。

European Fall Academy 2009も開催され、5月頃から受付が開始されますので、そちらもご注意ください。

2008年度 修士課程プログラム修了生

氏名	所属	修士論文題目
内田力	総合文化研究科 地域文化研究専攻 欧州研究プログラム（ESP）	『ホモ・ルーデンス』と『無縁・公界・楽』に共通する形態学的歴史学—歴史学による文明批評
佐々木恭介	総合文化研究科 地域文化研究専攻 欧州研究プログラム（ESP）	ナショナリズムと文化興隆のはざま—GAA設立の歴史的意義についての考察
半田恭明	総合文化研究科 地域文化研究専攻 欧州研究プログラム（ESP）	フランス電力セクターのヨーロッパ化：電力自由化に関する96年EU指令をめぐって
山内一馬	総合文化研究科 地域文化研究専攻 欧州研究プログラム（ESP）	政策から見る文化—フランスにおける「文化的例外」をめぐる言説と過程
吉田苑子	総合文化研究科 地域文化研究専攻 欧州研究プログラム（ESP）	第二次世界大戦に文化都市ヴァイマルとブーヘンヴァルトーナチからDDRへの変化
清水謙	総合文化研究科 国際社会科学専攻 欧州研究プログラム（ESP）	冷戦後のスウェーデンの外交および安全保障政策—「移民の安全保障化」の視点から
中村達也	総合文化研究科 国際社会科学専攻 欧州研究プログラム（ESP）	現代イギリス政治におけるエドワード・ヒース—「Uターン」と労使関係政策
ツイック・ジャンポール	総合文化研究科 国際社会科学専攻 欧州研究プログラム（ESP）	ナショナルアイデンティティと経済—日本とドイツの比較
齋藤翔太郎	経済学研究科 経済史専攻 ドイツ・ヨーロッパ研究修了証（ZDS-MA）	世紀転換期外国人問題と1905年外国人法の制定に関する一試論—『外国人移民調査勅命委員会報告書』分析
小西杏奈	経済学研究科 現代経済専攻 ドイツ・ヨーロッパ研究修了証（ZDS-MA）	フランスにおける現代的所得税制の形成—1959年税制改革の考察
柴田脩平	経済学研究科 現代経済専攻 ドイツ・ヨーロッパ研究修了証（ZDS-MA）	スロヴァキアのEU加盟・ユーロ導入への政治経済改革—「後進国」としてのスロヴァキアの「先進性」
福田直人	経済学研究科 現代経済専攻 ドイツ・ヨーロッパ研究修了証（ZDS-MA）	シュレーダー政権期の企業課税改革